

博士學位論文要旨集

内容の要旨および審査の結果の要旨

第 20 集

平成28年3月

二松學舎大学

はしがき

この冊子は、学位規則（昭和28年4月1日文部省令第9号）第8条の規程による公表を目的として、平成27年度本学において博士の学位を授与した者の、論文内容の要旨及び論文審査結果の要旨を収録したものである。

目次

学位の種類等	学位番号	氏名	学位論文題目	頁
博士（文学）	甲第51号	久米 晋平	李二曲儒学思想の研究	1
博士（文学）	乙第13号	谷津 未佳 (旧姓：金子)	野口雨情研究 — 童謡・民謡詩人の伝記的考察 —	13

博士学位（甲）論文審査報告

氏名	久米 晋平		
学位の種類	博士（文学）		
学位記の番号	甲第51号		
学位授与年月日	平成27（2015）年9月30日		
学位授与の要件	学位規則第3条第1項該当		
学位論文題目	李二曲儒学思想の研究		
論文審査委員	主査	家井 眞	本学文学部教授
	副査	町 泉寿郎	本学文学部教授
	副査	大島 晃	上智大学名誉教授
	副査	江藤 茂博	本学文学部教授

論文内容の要旨

本論文「李二曲儒学思想の研究」は、中国明末清初期の儒学者李二曲（顛、1627～1705、陝西盩厔の人）が志向した儒学とはいかなるものであり、そしてそれが宋学（程朱学・朱子学）明学（陸王学・陽明学）を経過した清初期にあつていかなる意味を持っていたのかという問題意識のもと、李二曲の言説（『二曲集』、『四書反身録』）に即して考察する。

李二曲を研究するにあたり、博士学位請求者（以下、請求者）は次のような研究計画を立てている。

一、李二曲の言説の精確な読解／二、李二曲と講学活動／三、李二曲の『四書反身録』と四書学史／四、黄宗羲、孫奇逢と共に「清初三大儒」と称された李二曲の時代的位置づけ／五、李二曲の後世への影響（特に日本に対して）

一の「李二曲の言説の精確な読解」は、本論文全編に渉る課題であり、本論文第一部第二章、第三章、第四章、第五章は、講学の場を記録した資料を活用することから、二の「李二曲と講学活動」と密接な関連がある。また、第二部に於いて、『四書反身録』及び呂涇野（栴、1479～1542）の『四書因問』、馮少墟（從吾、1556～1627）の『疑思録』を取り上げたのは、三の「李二曲の『四書反身録』と四書学史」に収斂される。

本論文は、上記の研究計画のすべてを実行しているとはいいい難いが、李二曲の言説の読解に主眼を置いた基礎的研究といえよう。

本論文の構成は、以下の通りである。

目次

序論 李二曲について

第一部 李二曲の〈学〉

第一章 修学過程と「悔過自新」

第一節 問題の所在

第二節 「切実なる功夫」を獲得するまでの歩み

第三節 体裁上から見た「悔過自新説」の特徴

第四節 「悔過自新」の実例

(一) 謝上蔡

(二) 薛敬軒

(三) 周處

第五節 「悔過自新」主張の意義

第二章 「觀感録」に込められた聖人像

第一節 問題の所在

第二節 生知と学知

第三節 「觀感録」梗概

第四節 「觀感録」述作の背景

第五節 王心齋の立志——孔子を学ぶ——

第六節 樵夫朱光信——王心齋の感化——

第七節 馮少墟に感化された朱貧士と張本徳

第八節 志向すべき聖人像とは

第三章 「效先覚之所為」をめぐって

第一節 問題の所在

第二節 馮少墟の「效先覚之所為」理解

第三節 高彙旃との交流

第四節 高彙旃の「学而時習之」理解

第五節 李二曲の「学而時習之」理解

第六節 馮少墟の「效先覚之所為」理解の受け止め方

第七節 先覚者をどう受け止めるか

第四章 〈心〉の確立

第一節 問題の所在

第二節 「學髓」述作の背景

第三節 〈心〉の定義

第四節 「念」とは

第五節 〈学〉は動静を兼修すること

- (一) 静に対する慎重な態度
- (二) 動静合一とは
- (三) 静的工夫の具体的手法

第六節 〈心〉の確立とは

第五章 明体適用の学

第一節 問題の所在

第二節 「整屋答問」に見る儒学者像模索の跡

第三節 明体適用の実践者を列挙した「體用全學」

第四節 李二曲編纂の適用書「司牧寶鑑」

- (一) 述作の意図
- (二) 構成要素とその体裁
- (三) 「呂公論属」
- (四) 「知府之職」
- (五) 「知州知県之職」
- (六) 「司牧寶鑑」の主旨

第五節 明体適用の学とは

小結

第二部 李二曲に影響を与えた呂涇野・馮少墟の四書解釈及びその展開

第一章 呂涇野の『四書因問』

第一節 問題の所在

第二節 呂涇野の生涯

第三節 体裁上から見た『四書因問』の特徴

第四節 王陽明の講学に対して

第五節 読書と尚行

- (一) 孔子の朝廷における言動と容貌
- (二) 孔子の衣食住
- (三) その他——孔子の君に事え、友と交わる道、容貌の変化、言動の細やかさ

第六節 『四書因問』に込められた善読という姿勢

第二章 馮少墟の『疑思録』

第一節 問題の所在

第二節 『疑思録』述作のその背景

第三節 体裁上から見た『疑思録』の特徴

第四節 「疑う」ということ

第五節	善読の実例
(一)	四書本文に対して
(二)	朱子説に対して
第六節	『大學章句』を改正した意図
第七節	『疑思録』は〈心〉に気付くための営為を示した書
第三章	李二曲の『四書反身録』
第一節	問題の所在
第二節	体裁上から見た『四書反身録』の特徴
第三節	なぜ四書なのか
第四節	「反身実践」的読解の実例——『大學』——
(一)	『大學』の捉え方
(二)	『大學』は明体適用の書
(三)	格物理解
(四)	平天下に対する言及
第五節	「反身実践」的読解の実例——『論語』——
(一)	「克己復礼」章について
(二)	「小道」章について
第六節	『四書反身録』とは

小結

結論

引用参考文献

以上

本論文の内容は、以下の通りである。

序論「李二曲について」では、これ迄李二曲がどのような人物として捉えられてきたかを、二曲の伝記（『清史稿』）に沿って確認し、更に先行研究を概観する。その上で、本論文の基本姿勢と研究目的は、李二曲が志向した儒学を二曲の言説に即して解明することにあると述べる。また、李二曲の学問と人物、及び交際した人物との関係を年表としてまとめている。

第一部「李二曲の〈学〉」では、李二曲の修学過程、学的基盤、講学活動の所産という観点をもとに、その学的特質を明らかにする。

第一章「修学過程と「悔過自新」」では、李二曲が「悔過自新説」（『二曲集』巻一）を刊行する三十歳迄の修学過程と「悔過自新説」の特質を考察する。

李二曲の修学時期は、明朝末期の崇禎年間（1628～1644）及び清朝初期の順治年間（1644～1661）の動乱期にあたる。この時期、なかでも陝西地方の住民にとって、生死という問題はより切実に受け止められていたが、李二曲も流賊に襲われたり、自警のために兵学を修めたとき

れる。李二曲は生涯「庶民」と自称したように、もともと名のある家柄でなく、加えて父李可從が「李自成の乱」に巻き込まれて戦死した後は、困窮極まる生活を余儀なくされた。

請求者は、このような時代状況及び生活環境が李二曲の〈学〉に深刻な影響を与えたと指摘する。更に、郷土の先人である馮少墟の言説に触れたことが、これ迄の日常生活に汲々としていた状況を打開する一大契機となったとし、以降、「聖学の淵源」（孔子・孟子が示した、人としての本来の在り方）を求めて、経書類、史書類を中心とした読書に励んだ姿は、知県（県知事）クラスの人士の認めるところとなったと指摘する。

請求者は、李二曲が「前言往行」（先人の書や風聞）を自らの師とし、それらを模範として「小人禽獣の域」（現状・生活環境）からの脱却を図ろうと努力した修学過程を跡付け、その到達点が「悔過自新」という手法に結実していると指摘し、「悔過自新」を李二曲の〈学〉の原型と位置づける。また、「悔過自新説」は、「小人禽獣の域」（現状・生活環境）から人（本来態）へ脱却し得たという実感のもと、その具体的手法を記録した書であり、あくまでも李二曲個人の思索結果と位置付ける。

読者対象への意識が希薄であった「悔過自新説」に比べ、李二曲の述作の多くは講学という場における質疑応答の様子を記録したものである。李二曲が講学の対象とした者は、知県や「明の遺老」（清朝に仕えなかった者）をはじめ、農民や商人など、多岐に渉る。

そもそも講学とは、各地に建設された書院での学問的集会であり、また、受講者という明確な対象を前に〈学〉を講じることでもあるから、受講者との対話に重点が置かれるのは勿論、講じる側の〈学〉に対する基本的姿勢やその時々抱いていた問題意識などが反映されやすい。加えて、受講者に教授内容を理解させるための工夫や、受講者の階層やレベルなど、様々な配慮が求められる場でもある。

続く第二章、第三章、第四章、第五章は、李二曲の言説の解析に加えて、以上の観点が意識された論述となっている。

第二章「『観感録』に込められた聖人像」では、李二曲が「観感録」（『二曲集』巻二十二）の編纂を通じて示した聖人像を考察する。

「観感録」は、李二曲自ら「類ひを以て自ら拘ふ者の鏡と為す」（「観感録序」）と述べているように、「類ひ」（出自、社会的立場）によって自らを抑制する者という明確な対象を意識した書である。その構成要素は、塩丁（製塩業）出身の王心齋（良、1483～1541）をはじめ、樵夫（木樵）、吏胥（末端の官吏）、窯匠（陶器製作者）、商賈（商人）、農夫、賣油傭（油売り）、戍卒（警備兵）、網巾匠（帽子制作者）といった、士ではない明人の伝記である。

李二曲は、「観感録」所収の者たちの修学の切っ掛けを、先覚者（先人）の風聞に触れることで「一人一人の心には孔子がいる（箇箇人心有仲尼）」と自覚した点に見出し、更に各々の立場で志を立て、〈学〉に励み続ける姿勢を聖人と見なしている。要するに李二曲のいう聖人とは、自らの良知を発揮する者、即ち〈学〉に志して不断に励む者を指すのであって、家柄や過去は考慮されない。たとえ士でなくとも〈学〉に励み続ける者は聖人なのである。

請求者は、以上の聖人観が、講学の場集った農民や商人に生きる自信を与え、参会する高位高官の者たちに自らの行いを回顧させるに効果があったと指摘し、ここに「観感録」述作の意図があったと述べる。また、「観感録」所収の者たちが、王陽明（守仁、1472～1528）の先蹤あるいは王心齋門下に連なる点を根拠として、李二曲の〈学〉を陽明学系統と見なすのは、表層的な読解であると断じている。

第三章「「效先覚之所為」をめぐって」では、「東林書院會語」（『二曲集』卷十一）に収録される、朱子学者高彙旃（世泰、1607～1677）との〈学〉をめぐりやりとりを考察する。

先覚者（先人）の言行を模範とする（「先覚の為す所に效ふ」）ことは、李二曲の一貫した姿勢であるが、その場合、単に先覚者の言行を追従するのではなく、本体（自己）の確立に資するか否かという明確な判断基準があった。この基準は、「聖学の要領」を悟る切っ掛けを与えた先覚者・馮少墟に対しても例外ではない。

東林書院において、高彙旃と〈学〉を論じ合った際、先覚者の言行をどう捉えるかという問題が生じた。

程明道（顥、1032～1085）、程伊川（頤、1033～1107）、朱子（熹、1130～1200）の教えを実践し、加えて伯父・高忠憲（攀龍、1526～1626）の〈学〉の継承を自負する高彙旃が、先覚者の言行に学ぶことこそ〈学〉であると考え、朱子が〈学〉の在り方として重視した〈敬〉を提示したのに対し、李二曲は「敬は乃ち工夫にして、本体に非ざるなり。」と述べている。つまり、〈敬〉は確かに重視すべきであるが、あくまでも〈学〉の一手段なのであって〈学〉ではないとの考えから、高彙旃の見解を斥けているのである。

更に高彙旃は、先覚者の言行に学ぶことを重視した馮少墟を持ち出して自説を補強すると、李二曲は、先覚者の言行はあくまでも〈学〉の初動段階における手段なのであって、先覚者の言行に学ぶこと自体が〈学〉ではないと応じている。

請求者は、以上のやりとりを跡づけて、両者は「先覚の為す所に效ふ」ことを重視しながらも、高彙旃は程朱や馮少墟という名を重んじ、李二曲は本体（自己）を重んじた点が見解の相違を産む原因であったと指摘し、両者の姿勢は〈学〉の捉え方をそのまま反映したものと述べる。

第四章「〈心〉の確立」では、「學髓」（『二曲集』卷二）に示される〈心〉の定義と〈心〉を確立するための具体的手法について考察する。

王陽明の「聖人の学は心学である」（「陸象山先生全集叙」）という発言は、後世の儒学者にとって意識されるものであった。それは自らの〈心〉をどう捉えるかという問題に直結するからである。この問題に対する李二曲の答えは、「學髓」に提示されている。

「學髓」は、天が我々に対して賦与したもののなかでも、まずはその大なるもの・〈心〉を確立せよ、という孟子の言葉を具体的に説明した書であり、〈心〉を確立する具体的手法として静的工夫——齋戒・静坐・香——を提示するところに特徴がある。

請求者は、李二曲が齋戒・静坐・香といった静的工夫を提示したのは、あくまでも自らの〈心〉

の働きを発揮させるための手段としてであり、静的工夫そのものを重視した訳ではないと指摘する。また、李二曲には静と動とは表裏一体の関係であるという思考があり、この思考をもとに禅者の静的工夫との違いを明確にしていると指摘する。

以上の考察を踏まえて請求者は、「學髓」は〈心〉の性格・働きを正確に捉える点に主眼が置かれた書であり、いわば儒学者としての工夫論を提示した書と見なす。更に、「學髓」を通して、天より賦与された〈心〉を自覚し、〈心〉の確立を求め続けることが〈学〉なのだという主張を展開していると述べる。

第五章「明体適用の学」では、「整屋答問」（『二曲集』巻十四）、「體用全學」（『二曲集』巻七）、「司牧寶鑑」（『二曲集』巻二十八）に即して、李二曲のいう明体適用を考察する。

一般に、清初期の儒学は、宋明性理学から清朝考証学への過渡的段階と位置づけられ、その特徴として経世致用（世間的有用性）の面が強いとされる。

明体適用は、朱子が提唱した「全体大用」の系譜に連なる語であり、歴代の儒学者が等しく主張したスローガンである。李二曲は、明体適用の、本体（自己）を鮮明にし実用に適うという根本義を重視し、更に明体と適用とが不可分の関係にある語構造に着目して「儒者の学は明体適用の学である」と主張、明体を実現することこそ適用なのだという主張を展開する。その背景には、どちらか一方に偏ったまま、儒学者を自任する者が横行していたからである。

請求者は、まず「整屋答問」の解析を通して、李二曲が理想とする儒学者像を「洛閩の諸大老」（程明道、程伊川、朱子）に見出し、彼等を明体適用の体現者と位置づけて、自らはその継承者たらしめる態度表明が見られると指摘する。

次いで「體用全學」では、宋代明代の儒学者の著述名を列举し、それらを明体類と適用類とに類別した意味を解析する。請求者は、中でも明体類について、更に「明体中の明体」と「明体中の工夫」とに類別し、前者には陸王学（陸象山、王陽明）系統の著述を、後者には程朱学系統の著述を配当している点に着目し、この措置は両者の〈学〉への方法論的差異を踏まえたものであり、明体適用を実践する儒学者という立場からして、何等矛盾するものではないと指摘する。

明確に為政者を対象とした「司牧寶鑑」は、先人の事跡を編纂した書である。「司牧寶鑑」の解析を通して、請求者は、李二曲が為政者に期待したことは、為政者としてのあるべき姿、即ち実心（まごころ）で実政（民衆救済）を行うことに他ならず、この在り方こそ明体適用であり、その体現者の言行を明体適用の理論的根拠として提示していると指摘し、「司牧寶鑑」に収録される呂新吾の『實政録』（抜粋）を解析する。結果、実社会に対して、対症療法的な策を提示することよりも、為政者の「民の父母」としての自覚を呼び起こすことに力点が置かれていると述べる。

また、李二曲の〈学〉は、あくまでも自己の確立に力点が置かれたものである。その一方で、実社会に対する方策として、例えば、良人（平民）や子女の売買を禁止するよう訴えたり、灌漑工事を提言したりという実用的な提言も行っており、その意味では世間的有用性も認められ

る。しかし、その主張の根柢には、実心（まごころ）で実政（民衆救済）せよという主張があったのであり、あくまでも為政者自身の覚醒を促すための提言なのであったと述べる。

第二部「李二曲に影響を与えた呂涇野・馮少墟の四書解釈及びその展開」では、第一部で明らかになった李二曲の〈学〉が四書読解にどう反映されているのかという観点を軸に、それに多大な影響を与えた呂涇野の『四書因問』、馮少墟の『疑思録』の内容を述べて分析し、その上で李二曲の『四書反身録』の考察に及ぶ。

朱子がいわゆる四書（『大學』『中庸』『論語』『孟子』）を確立して以来、歴代の儒学者は四書の解釈にことよせて自らが志向する〈学〉を模索してきた。夥しい数の四書注釈書はその営為の跡である。

李二曲は、四書注釈書のなかでも、蔡虚齋（清、1453～1508）の『四書蒙引』、呂涇野の『四書因問』、馮少墟の『疑思録』を必読書として挙げている。

蔡虚齋の『四書蒙引』を挙げたのは、朱子の解釈を忠実に踏襲し、初学者に有用という点に着目したからである。加えて陳紫峰（琛、1477～1545）の『四書淺説』、林次崖（希元、1481～1565）の『四書存疑』、唐汝諤（1551～1641?）の『四書微言』、張太岳（居正、1525～1582）の『四書直解』といった朱子注を敷衍した注釈書を挙げているのも、同様の理由による。

一方、呂涇野の『四書因問』と馮少墟の『疑思録』については、蔡虚齋の『四書蒙引』とは選択理由が異なっている。李二曲に拠れば、『四書因問』と『疑思録』は徳業に資する四書注釈書なのであって、制举（科挙）対策に資するものではない。学ぶ者は呂涇野と馮少墟の意（思い）を理解すべきだ、と述べている。請求者は、李二曲が両書のどの点を徳業に資すると考えていたのかを明らかにするためには、両書がいかなる性格を有するのか確認する必要があると考える。

近年、「四書学」という研究領域が意識され、主に宋代以降の四書関連書に対する体系的かつ史的な研究が進められつつある。ただ、四書を「反身実践」の材として活用した李二曲の存在はあまり顧みられておらず、呂涇野の『四書因問』と馮少墟の『疑思録』についても同様である。請求者はこの点を重視し、まず、李二曲が特別視した呂涇野の『四書因問』と馮少墟の『疑思録』の特徴を明らかにし、その上で二曲の四書解釈の跡をまとめた『四書反身録』の考察に及ぶ。『四書因問』、『疑思録』、『四書反身録』という、三つの注釈書を経時的に捉えることは、四書学史の一端を明らかにすることにもなると考えられるからである。

第一章「呂涇野の『四書因問』」では、呂涇野の四書注釈書である『四書因問』を考察する。

『四書因問』は、『四書集注』を基軸とした四書注釈書であり、全編に涉って、質問者の四書に関わる問いに因んで呂涇野が答えを提示するという、問答体のスタイルが最大の特徴である。

通覧すると質問は種々雑多であり、また質問者のレベルや関心なども異なるためか、雑駁な印象は否めず、また、『四書因問』には字義的な説明が多く、挙業（科挙対策）向けとも見なされるが、呂涇野としてみれば、四書の内容を教授する際、字義的な説明になるのは四書の内容を正確に理解させようとするからであって、あくまでも実践のための説明なのである。

請求者は、『四書因問』は質問者の疑問を解消する切っ掛けと、四書をどう読み解けばよいのかという答えを、「聖人の思い」に依拠して示した跡であると指摘し、「行を尚ぶ」呂涇野の学的姿勢が顕れた書であると述べる。

呂涇野が王陽明の良知説に懐疑的だったのは、陽明の説き方では各人の問題意識に即した解答は提示できないという考えからである。請求者は、呂涇野の講学が王陽明の講学と二分するほどの活況を呈したのは、涇野の質問者に対する丁寧な対応の証なのであって、このような姿勢が『四書因問』に反映されていると述べる。

請求者は、呂涇野が重視した「善読」という姿勢を、「聖人の思い」を理解するための具体的方途であり、『四書因問』に見られる丁寧な解説は、質問者の疑問を解消するためだけでなく、自らの理解を検証する作業でもあったと指摘する。また、疑問を抱いた者への対症療法的な言辭は王陽明、ひいては王陽明門下の専売特許のようにいわれるが、呂涇野の言説にも見られる特徴であり、この時代に盛行した講学活動の所産と見なし得ると述べる。

第二章「馮少墟の『疑思録』」では、馮少墟の四書注釈書である『疑思録』を考察する。

馮少墟の『疑思録』は、四書全体に対する注釈書ではない。その述作姿勢は、四書本文及び『四書集注』に対する信頼を前提としつつ、四書を読解するにあたって生じた疑義を解消する過程を示すものである。例えば、言及のない箇所は、四書本文及び『四書集注』を全面的に理解し肯定したという証である。この点からして、挙業（科挙対策）向けではないことが分かる。

馮少墟がなぜ「疑う」という行為を重視したかといえば、それは四書に示される「千古不磨の心」に気付くためである。これは、四書の内容を実践に活かそうとすることに他ならない。四書読解にあたっては、朱子や王陽明といった先入主は存在せず、朱子も王陽明も「千古不磨の心」に気付くために工夫（努力）した人物として同一視される。馮少墟が両者に差異を見出すとすれば、〈学〉の具体的手段に対してである。この姿勢は『大學章句』を改正するという行為に顕れている。

請求者は、『疑思録』に通底する「疑い」という行為は、聖人と凡人とを問わず、万人が具有している「千古不磨の心」に気付くための営為であり、その姿勢を「善読」と評されたと指摘する。

第三章「李二曲の『四書反身録』」では、李二曲の四書注釈書である『四書反身録』を考察する。

『四書反身録』は、四書本文及び『四書集注』の内容を「反身実践」の材として活用し、読解した跡を記録した書である。四書に対する逐条的な言説ではなく、その文体も長短入り交じっており、体裁上の統一は見出せない。請求者は、この不揃いさが李二曲の自問自答の跡を象徴していると述べる。つまり、言及のない箇所は、自問した結果、四書の内容と自身との一致が見られた証であり、詳細な言及をしている箇所は、精確な理解が要請される内容と捉えていた証である。格物に対する詳細な説明は、その一例である。李二曲の姿勢は、馮少墟の『疑思録』に見られる「疑う」という姿勢と共通すると指摘する。

李二曲の四書理解は、一見『四書集注』を基軸としているようだが、『四書集注』を踏襲することに力点は置かれていない。あくまでも四書本文をどう「反身実践」するかという点に主眼がある。

例えば、『大學』に対しては、明体適用の書という意識のもと、明体と適用双方に対する精確な定義と、伝十章に関する言及が多いことが特徴として挙げられる。これは「平天下」を志向すべき為政者の自問に期待したからである。

また『論語』の「克己復礼」に対しては、己をどう捉えるかという点に苦心し、まず実際の己を「身の私欲」と捉え、私欲を除去して本来の己に復帰することの大切さを説き、その手立てを先人の事跡に見出している。これは、先人の著述や風聞を師とする李二曲独自の見解といえる。

李二曲にとって、四書は徹底的な自己検証の材料であり、四書の内容を自身及び実社会に活かそうという姿勢（「反身実践」）が根幹にあった。この読書姿勢を「善読」と表現して提唱したのである。

請求者は、四書を「善読」という姿勢は呂涇野、馮少墟、李二曲に共通するものとし、二曲が涇野の『四書因問』と少墟の『疑思録』を特別視したのは、両者に「善読」という読書姿勢を見出したからに他ならず、この姿勢を徳業と表現していると述べ、更に二曲は、涇野と少墟に共通する「善読」という読書姿勢を積極的に受容し、「反身実践」という在り方に展開させたと述べる。

以上の考察を踏まえて、請求者は『四書因問』、『疑思録』、『四書反身録』に共通する「善読」という読書姿勢を媒介とする時、呂涇野→馮少墟→李二曲という系譜が見出せるとし、この系譜は、明代中期から清初期にかけての四書学史の一端として、意識されるべき系譜と結論付ける。

論文審査の結果の要旨

本研究の最大の特徴は、我が国に於いて初めて李二曲が明末清初期の思想界の中で、独自に自らの〈学〉の在り方を追い求める有様を明らかにし、主要な著述（資料）を丹念に分析し、一本にまとめた点にある。

李二曲研究の専著としては、林繼平『李二曲研究』（1970年）、王孺松『李顛』（1978年）、朱康有『人道真理的追尋——李二曲心性実学研究』（2003年）、許鶴齡『李二曲「體用全學」之研究』（2004年）、房秀麗『追尋生命的全体大用——李二曲理学思想及其教育的価値』（2010年）等、中国、台湾に数冊ある程度で、日本では皆無である。

そもそも請求者は、朱子と陸象山（九淵、1139～1192）の折衷、あるいは朱子と王陽明の折衷という評価から等閑視されがちであった李二曲の言説を虚心に読解し、折衷に込められた真意の解明を志した。李二曲の言説は、「朱子学者」か「陽明学者」か、あるいは「折衷学者」か、

という視点では読み解くことはできず、素朴ではあるが「儒学者」という視点によってはじめて肉迫できるのではないかという思いからである。歴代の先人の言行を積極的に受容し、実践に活かそうとした李二曲の在り方を跡づけた本研究は、請求者の思いを裏付けるに十分な説得力を持ち得ている。

例えば、第一部第二章で扱った「観感録」は、収録される人々の大半が黄宗羲『明儒學案』の「泰州学案」に見られることから、現状では王陽明門下における〈学〉の向き合い方を知る補助的資料として扱われるに過ぎない。請求者は、李二曲の言説に即して、王陽明門下という限定的な視点を排除し、人としての本来の在り方を気付かせる書として位置づけたのは、清初期に於ける講学活動の実態を知るという点で意味あることといえる。

第一部第三章で取り上げた高彙旃は、東林書院を支えた人物として著名であるが、現状ではあまり注目される人物とはいえない。部分的ではあるが、本研究に於いて高彙旃の言説を考察したことは清初期の思想界を考える上でも有益である。

清初期に於ける儒学の特徴として経世致用の学を挙げ、明体適用を掲げた李二曲もその一翼を担ったという見解は、山井湧氏を踏襲するものである。第一部第五章で扱った「司牧寶鑑」は、明体適用の実践者としての先人の事跡をまとめた書であったが、その中に収録される呂新吾（坤、1536～1618）の『實政録』（抜粹）について、李二曲が「最も適用たり」と評したことに着目してその内容を丁寧に分析したことは、二曲のいう明体適用をより鮮明する意味で評価できる。

第二部「李二曲に影響を与えた呂涇野・馮少墟の四書解釈及びその展開」で扱った、呂涇野の『四書因問』、馮少墟の『疑思録』、李二曲の『四書反身録』については、これまで本格的な研究は皆無といって良く、特に呂涇野については「明代の朱子学者」という程度の認知度である。

本研究に於いて、『四書因問』、『疑思録』、『四書反身録』の存在とその内容を分析し、更に四書を「善読」するという観点から呂涇野→馮少墟→李二曲という系譜が見出し得ると結論付けたことは、四書学史研究を一步前進させるものとして評価できる一方、請求者も指摘しているが、李二曲は実際に自然災害への対処法や人身売買禁止を提言するなど、常に社会に目を向けた言行を示していた。李二曲のいう明体適用の内容をより詳細にするためには、為政者の「民の父母」としての〈心〉に期待する言説にのみ着目するのではなく、具体的施策に関する言説も考察対象としている点も新しく、評価し得よう。

ただ、請求者は李二曲が黄宗羲や孫奇逢と共に「清初三大儒」と称された意味を明らかにする必要性を感じながらも言及していない。黄宗羲や孫奇逢との学説上の相違点などを鮮明にすることで、より一層李二曲の明末清初期の思想史上の存在意義が明らかになるのではなかろうか。

関連して、本研究は李二曲の言説を精確に読解・分析することに主眼が置かれているためか、二曲が注目した先人への言及は詳細を極めるが、二曲の言行がどのような影響を与えたのかに

については同時代人を感化した点への言及に限られ、後世に対する影響について触れていないのは遺憾である。

将来、このような課題を着実に継続することによって、清初期の思想界ひいては日本漢学へと視野を拡げることが期待される。更に、中国學術史上に於ける李二曲の學術的位置付けも視野に入れ、これらの研究を纏めていくことを望む。

また、本研究が我が国に於ける李二曲研究の専著として、今後我が国の李二曲研究の出発点となることは間違いない。

よって、本審査委員会は、本研究を博士（文学）の学位論文に相当するものと認定する。

博士学位論文審査報告

題	目：野口雨情研究——童謡・民謡詩人の伝記的考察		
氏	名：金子（谷津）未佳		
論文審査委員：主査	山口直孝	本学文学部教授	
副査	江藤茂博	本学文学部教授	
副査	庄司達也	東京成徳大学人文学部教授	
副査	町 泉寿郎	本学文学部教授	

論文要旨

本論文は、童謡詩人野口雨情（1882年〔明治15〕～1945年〔昭和20〕）の伝記研究であり、『〈日本の作家100人〉 野口雨情——人と文学』（勉誠出版、2013年9月）を基盤としたものである。雨情の足跡の解明や作品の発掘によって先行研究の空白を埋めることが目指され、とりわけ詩壇に登場前後の地元茨城での創作活動の実態の把握に力が注がれている。

本論文の分量は、400字詰原稿用紙約860枚であり、構成は、以下の通りである。

序論

第一章 学生時代——詩壇登場

- 一 生い立ち
- 二 東京専門学校時代
- 三 初期社会主義思想と挫折
- 四 水戸における作品発表と郷土紙『常総新聞』
- 五 「野口夕吹」と雨情

第二章 青年時代——再起を期す

- 一 帰郷
- 二 郷土紙『いはらき』との関わり
- 三 『枯草』出版
- 四 筆名の変遷について
- 五 意欲旺盛な一年
- 六 結婚——妻ヒロと野口秋星

第三章 樺太、北海道時代——落魄詩人

- 一 樺太行き
- 二 『朝花夜花』出版
- 三 北海道時代の雨情と石川啄木
- 四 「詩壇空白期」へ

第四章 詩壇への復活

- 一 木星記念会
- 二 長久保紅堂との再会
- 三 『茨城民友』掲載作品
- 四 『都会と田園』出版
- 五 「枯れすすき」と水戸時代

第五章 童謡・民謡詩人として

- 一 上京
- 二 童謡詩人野口雨情——『金の船』『金の星』
- 三 童謡普及運動と「夕焼論争」
- 四 民謡詩人野口雨情——民謡集『別後』出版

第六章 昭和初期の雨情とその晩年

- 一 新民謡運動と旅——「高松小唄」を一例として
- 二 校歌・社歌等の制作
- 三 戦時中の作品と晩年の創作
- 四 終焉の地へ

結論

野口雨情略年譜

主要参考文献

資料 野口雨情著作・資料年表（活躍前期）

「序論」では、野口雨情没後の研究動向が、新資料の発見を軸にたどられている。家族・知人・地縁者・愛読者らによって結成された複数の会における顕彰活動を通じて、雨情の伝記研究が着実に進展したものの、活動の初期や詩壇にあまり登場しなかった時期の動向については不明の点が多かったことが指摘されている。先行研究の問題を整理しながら、本論文が年譜の空白を埋めることで雨情の足跡を明らかにし、童謡・民謡詩人としての野口雨情を検証していく上で基盤を築くものであることが述べられている。

「第一章 学生時代——詩壇登場」では、雨情の誕生から詩壇登場までの時期が扱われている。「一 生い立ち」では、誕生当時の野口家の家族関係、経済状況が説明され、学

歴が確認されている。高等小学校の友人渡辺源四郎から文学的影響を受けたこと、上京して東京数学院尋常中学に進学した際には叔父野口勝一に世話になったことなどが述べられ、また、その後進学した順天求合社中学校の中退時期については、友人宛ての書簡の文面から1900年以降の可能性が高いことが新たに指摘されている。「二 東京専門学校時代——詩壇登場」では、1901年に東京専門学校高等予科文学科に入学した雨情が本格的な創作活動を行っていく過程が追跡されている。1902年には大阪で発行されていた雑誌『小柴舟』や『新天地』に新体詩が発表され始め、「雨情」の筆名も使われるようになる。同時期の雨情が『婦人と子ども』・『少国民』・『女子の友』といった女性・子供向けの雑誌や『労働世界』・『社会主義』のような社会主義の傾向の強い雑誌にも寄稿していたことが記され、「北濤野人」などの筆名を用いて『世界の旅行博士』という童話を発表していたことが新発見の事実として挙げられている。「三 初期社会主義思想と挫折」では、原霞外・児玉花外との交流を通じて『労働世界』（のち、『社会主義』と改題）と関わるようになった雨情の、同誌に寄せた作品群が見渡されている。第一詩集『枯草』に収録される「村の平和」を含むそれらには社会主義への共感と共にキリスト教の影響も看取される。雨情が日露戦争の頃には社会主義から離れたという従来の見解については、1905年の時点で『いはらき』の新体詩選者として反戦詩を採っていることが反証として挙げられ、見直しの余地があると指摘されている。「四 水戸における作品発表と郷土紙『常總新聞』」では、『学報』・『いはらき』・『常總新聞』など水戸で刊行されていた紙誌での雨情の活動が追跡され、新聞記者をしながら小瀧水郷・鹿野目徑ら同世代の青年と親密な関係を形成していったことが述べられている。「五 「野口夕吹」と雨情」では、『常總新聞』1901年10月19日に発表された夕影（矢橋夕影）「懐友帖」で呼びかけとなっている「野口夕吹兄」が雨情であることを周辺資料や表現から判断されている。また、友人とのつながりから雑誌『小柴舟』との関係が生じたこと、二人の「さびしき名」という認識の共有が筆名を改めさせたことなどが推測されている。さらに、『いはらき』記者であった東白嶺がそれまで雨情を認知していなかった理由が、雨情が別名を使用していたこと、非常勤で勤めていたという事情に求められている。

「第二章 青年時代——再起を期す」では、家庭の事情で中央文壇を離れざるをえなかった時期が考証されている。「一 帰郷」では、1904年1月に父量平を亡くし、家督継承のために帰郷した雨情が雑誌『あけぼの』に作品を発表していたこと、生涯の友人久木独石馬との交流を深めたことが確認されている。「二 郷土紙『いはらき』との関わり」では、雨情の創作が活発化し、『常總新聞』・『いはらき』などに詩を多数発表するようになる1905年以降の時期を対象に、検討が加えられている。『いはらき』に発表された「北洞野客」名義の随筆が雨情の作品であると判断され（随筆中の筆名の知人も特定されている）、友人との交流の中で漂泊意識が形成されていったことが示されている。また、発表作品が第一詩集『枯草』に収録される際にどのように改稿されたかが調査されている。さらに、『いはらき』の詩の投稿欄の選者になった雨情が選んだ「安田雨村」名義の作品が雨情の手によるものではないかという可能性が指摘されている。「三 『枯草』出版」では、1905年に水戸市の高木知新堂から自費出版された第一詩集『枯草』の成立事情が考察されている。当時の案内書などに基づいて刊行元の高木知新堂の営業状況が明らかにされた後に、詩集の構成、初出の書誌情報が挙げられている。『枯草』という暗さを感じさせる題名は、

社会主義を主張できない自己への検証意識に拠ると言う。また、『いはらき』に掲載された東白蘋による紹介文などを踏まえて、未完成ながら清新な詩風が評価されていた状況が明らかにされている。さらに関連して、同時期に雨情が同郷の文学者たちと木星会を結成し、同会での活動を通じて民謡や子守歌の創作を始めていたことが確認されている。中央文壇での反応や後の評価を通覧した上で、文語文体詩を基調としつつ、童謡的な作品を含む『枯草』は、雨情の原点と評価するに足る詩集であると結論づけられている。「四 筆名の変遷について」では、雨情が別に「烏城」・「烏蝶」・「雨蝶」・「芋杖」・「勿南」・「勿南壮士」・「勿来の居士 大蝶吹太郎」・「蚊骨」・「木剣壮士」・「草中木治」・「北洞野客」・「北鳴野人」・「北濤」・「北濤野人」などの筆名を用いたことが指摘され、「北洞野客」名義の俳句（『ホトトギス』1906年1月）が新たに雨情作品であることが特定されている。同時に、雨情筆とみられていた「雨蝶」作の俳句・和歌（『文庫』1897年4月）については、雨情が俳句に近づくのが後のことであることから、別人のものと判定されている。雨情の俳句作りは、武石女羊らと茨城磯原で結成された潮響会での活動から始まったものであり、「北」を筆名に好んで入れたのは、父や伯父の好みに倣ったこと、北海道・樺太に対する関心の反映であることが推察されている。「五 在京紙誌での活躍」では、1905年に雨情が水戸で刊行された『軍國之少年』・『急先鋒』にも寄稿しており、さらには『月刊スケッチ』・『毎日新聞』・『讀賣新聞』・『ハガキ文学』などの中央の紙誌にも作品を発表するなど、創作活動が活発な年であったことがたどられている。1905年は、雨情にとって詩人としての方向が定まると同時に、家の事情から悲嘆に駆られる両義的な年であったと概括されている。「六 結婚—妻ヒロと野口秋星」では、高塩ヒロとの結婚生活が検証されている。関係資料および先行研究を批判的に見直し、雨情・ヒロが1904年11月に婚礼、1905年5月に婚姻届を提出したと特定されている。また、ヒロが「秋声女史」の筆名で『いはらき』に文章を発表するなど文才があり、野口の創作に影響を及ぼすと同時に、勝気な性格が雨情の友人から好意的に受け止められなかった面があったことに注意が向けられている。

「第三章 樺太、北海道時代—落魄詩人」では、1906年から1909年にかけての樺太、北海道在住時の足跡・創作活動が対象とされている。「一 樺太行き」では、1906年に定型の俗謡に関心を深めていた雨情が、伯父勝一の死後に樺太に赴いた経緯が考察されている。国境線を確定させる劃境委員あるいは報知新聞通信員として雨情が渡航した、あるいは事業目的で向かったというこれまでの諸説がいずれも明確な根拠を持たないことが示され、判断が保留されている。また、「樺太航路」（『ハガキ文学』1907年2月）などから、雨情が樺太に積極的な関心を寄せ、正しい知識を持っていたことが指摘されている。「二 『朝花夜花』出版」では、1907年1月、3月に自費出版された詩集『朝花夜花』の意義が論じられている。後に雨情が「日本に於ける最初のパンフレット」と称した本詩集において、童謡に近い口語定型詩が試みられ、「七つの子」の原型となる「山鳥」の収録が示すように、童謡・民謡詩人としての基盤が確立されたと評価されている。直後の北海道行については、詳細な事情は不明としながら、鬱屈した思いを抱えての選択であったと推測されている。「三 北海道時代の雨情と石川啄木」では、消息記事などを手がかりに雨情が北鳴新報社・小樽日報社・胆振日報社などで新聞記者を務めていたことが説明されている。現存する『小樽日報』第三号の無署名記事のうち、「樺太の露人」が雨情筆であると判断さ

れているほか、石川啄木との関わりや坪内逍遙の励ましを得ながら、雨情が北海道での見聞を創作に活かそうとしたことがたどられている。「四「詩壇空白期」へ」では、東京に戻った雨情が有楽社『グラフィック』の編集に携わりながら、口語俗謡詩への意欲を強めていたにもかかわらず、母テルの死亡と有楽社の解散とによって1912年6月より故郷磯原に逼塞しなければならなかった時期が検討されている。諸資料から雨情が高塩家の地主経営を手伝ったり、漁業組合長や消防団長を務めたり、万弁社という事業体に関わったりしていたこと、財産分与の問題から戸籍上ヒロと1915年5月に離婚し、1917年に至って実質的な夫婦生活も解消されたことなどが考証されている。

「第四章 詩壇への復活」では、1918年地元での文学運動をきっかけに再開した、雨情の創作活動が検討されている。「一 木星記念会」では、1918年1月6日に水戸市で開催され、横瀬夜雨・山村暮鳥ら約三十名が集った木星記念会への出席に刺激を受けた雨情が創作を再開させたこと、中里つると再婚した新婚家庭で詩作に集中していたことが述べられている。「二 長久保紅堂との再会」では、再開した創作の発表舞台として、旧友長久保紅堂の経営していた『茨城民友』・『茨城少年』が大きな役割を果たしたことが指摘されている。「三『茨城民友』掲載作品」では、『茨城民友』に掲載された作品（現物未確認のものを含む）がすべて旧作の再発表であり、創作再開前の雨情が自身の名を世間に再認識させるための行為であったと推量されている。「四 『都会と田園』出版」では、1919年6月に東京の銀座書房から刊行された詩集『都会と田園』が分析されている。収録作品が確認された後、後半の『己の家』連作が通覧され、韻文構造を孕んだ口語自由詩の独自の達成が帰郷後の雨情が目にした風景に基づくものであることが述べられている。また、詩集刊行後も雨情が『茨城民友』の社員として文芸主任を務め、地元との繋がりを重んじていたことにも触れられている。「五 「枯れすすき」と水戸時代」では、水戸時代の代表作である『枯れすすき』（原題『船頭小唄』）が検討されている。利根川や潮来を舞台とした本作を、雨情が实景に触れないまま作った事情に触れ、想像を膨らまることが雨情の創作方法の一つであったことが提示されている。また、水戸在住時に雨情は、「尋常小学国語読本に載れる韻文の芸術的詩価値」（『茨城教育』1920年6月）などの評論も発表しており、民謡・童謡の価値を確信するようになっていったことにも注目が必要であることが述べられている。

「第五章 童謡・民謡詩人の誕生」では、童謡・民謡詩人としての活動が本格化し、地位を確立させていく時期を対象に、創作の軌跡と童謡普及の運動の実態とが調査されている。「一 上京」では、西條八十から斎藤佐次郎を紹介された雨情が、斎藤の始めた『金の船』（のち『金の星』）に1919年11月の創刊号から毎号童謡を発表するようになり、『鈴虫の鈴』や『四丁目の犬』といった代表作が曲譜付きで掲載されていたことが説明されている。また、翌年三月から投稿欄の童謡選者になった雨情が選評で童謡を「一番優れた、一番たふとい国民詩」という主張を唱えていたことにも触れられている。「二 童謡詩人野口雨情——『金の船』『金の星』」では、『金の船』発表作品を中心に、雨情の童謡詩人としての活躍が検証されている。雨情は、『十五夜お月さん』・『千代田のお城さん』などの代表作を発表し、『童謡作法問答』（尚文堂、1921年10月）などの手引書を手がけるようになる。童謡論においては、雨情が、童謡を禁ずる教育政策に批判的な立場を取るな

ど、教育への関心を強めていったことや、児童雑誌の衰退の中明るさに重点を置いた「新おとぎ唄」を新たに提唱していたことなどが注目されている。『コドモノクニ』・『金の星』など発表媒体を多く得た雨情は、『シャボン玉』・『黄金虫』などを精力的に発表していった。最初の童謡集『十五夜お月さま』（尚文堂、1921年6月）が文部省認定図書となり、さらには皇族の台覧の対象となったことが表すように、雨情の社会的地位は揺るぎのないものとなっていった。『七つの子』については、解釈が分かれていた「七つ」の理解を、雨情の発言に基づいて「たくさん」と解する立場が採られている。『證誠寺の狸囃』（『金の星』1924年12月）については、證誠寺の住職から作り物という抗議を受けた挿話を挙げながら、雨情の童謡創作の方法が示されている。「三 童謡普及運動と「夕焼論争」」では、1920年9月の東京童謡会結成以降の雨情の精力的な童謡普及運動の具体が追跡されている。『金の船』の消息記事などを参照することで、雨情が全国の教育現場に出向き、唱歌に代わるものとして童謡を薦め、教師や児童に創作や歌唱を促していった活動の詳細が明らかにされている。雨情の運動は、地方での童謡普及運動の誕生を促すものであると同時に、異なる童謡観を持つ者との衝突をも生んだ。『常総新聞』紙上で雨情と横瀬夜雨との間で繰り広げられた「夕焼論争」の経緯が、関係者の言説を含めて詳細に提示され、歌謡の一分野として童謡をとらえる雨情と児童自由詩の中で広く童謡を考える夜雨との立場の異なりが論争の原因であったことが考察されている。「四 民謡詩人野口雨情——民謡集『別後』出版」では、民謡集『別後』（尚文堂、1921年2月）以後の雨情の創作民謡をめぐる活動が見渡されている。童謡の普及活動と並行して、雨情が創作民謡の演奏・講演会を全国で催したこと、「耳の詩である、音楽である」という考えに立って『極楽とんぼ』（黒潮社、1924年1月）などの民謡集を次々と刊行していったことが説明されている。

「第六章 昭和初期の雨情とその晩年」では、戦時色が徐々に強まっていく時期における雨情の創作の変化が検証されている。「一 新民謡運動と旅——「高松小唄」を一例として」では、「国土的作品」として「新民謡」の創造を訴えて1928年に日本民謡協会を設立した雨情のさまざまな取り組みが確認されている。運動の実例として「高松小唄」制作に際して雨情が地元とどのように関わりを持ち、いかに取材して詩作に結び付けていったかが挙げられ、多数の人間と交渉の中で一つの作品が生まれていく実情が提示されている。「二 校歌・社歌の制作」では、雨情が手がけた校歌・社歌が取り上げられている。土浦市立土浦小学校校歌やキッコーマン醤油社歌など、地元のを始めとする校歌・社歌が相当数に上ることが記され、1938年から1941年に制作が集中しているのは童謡の作詞が減ったことを受けてのことであるという事情が推察されている。なお、新聞記事の発掘により、1928年に雨情が託児所吉祥寺児童園の設立に関わったことが付け加えられている。「三 戦時中の作品と晩年の創作」では、児童雑誌の減少に伴い、童謡の発表が減少すること、『満州前衛の歌』・『爆弾三勇士』など、軍隊や戦争に取材した歌が増えていく晩年が取り扱われている。「戦争は詩にならない」と子どもに語っていた雨情が、意に染まないことでありながら、周囲の求めで時局迎合的な作品を発表し続けた事情が説明されている。「四 終焉」では、1944年1月、病氣療養のため、栃木県河内郡姿川村鶴田に疎開した雨情が1945年1月に亡くなるまでの状況が略述されている。当時の報道が紹介され、また、遺稿となった詩について、夫人による加筆という証言に疑念が挟まれている。

「結論」では、本論での具体的な検証を踏まえて、新たに判明した伝記的事実や書誌的情報が確認されながら、時期ごとの雨情の創作活動の特徴が整理されている。新体詩人として出発した雨情は、童謡・民謡詩人としての地位を確立した以降は、それらの創作に専念し、ジャンルの普及に努めた。雨情の童謡・民謡詩人としての活動は主体的なものであり、広く世に受け入れられたのは、創作の方向性が時代の趨勢と一致していたための現象であり、あくまで結果であったと総括されている。

「野口雨情略年譜」は、本論の成果を反映させてまとめられたもので、著述目録を兼ねている。私人としての足跡が記されると同時に、地元詩誌や少年誌などを発表媒体に含む雨情の活発な創作が丹念に拾われている。「資料 野口雨情著作・資料年表（活躍前期）」は、童謡詩人として活躍を始める1920年までを活躍前期として区分し、現時点で確認できる野口雨情の全業績（草稿・書簡を含む）および言及文献を年代順に並べたもので、昭和女子大学近代文学研究室『近代文学研究叢書 第五四巻』（昭和女子大学近代文化研究所、1983年4月）掲載の「著作年表」・「資料年表」（槍田良枝編）を大幅に増補したものとなっている。

審査結果要旨

本論文は、野口雨情の足跡を綿密な資料調査によって正確にたどろうとした伝記研究である。雨情の伝記には、すでに平輪光三『野口雨情』（雄山閣出版、1957年7月）、長久保片雲『野口雨情の生涯 創作民謡・童謡詩人』（暁印書館、1980年9月）、野口存彌『野口雨情 詩と人と時代』（未来社、1986年3月）、野口不二子『郷愁と童心の詩人 野口雨情伝』（講談社、2012年11月）などがあるが、近親者・知人による評伝は、十分な裏づけのないまま雨情の証言を事実として扱ったり、時期によっては記述が粗かったりするなどの問題をはらんでいた。年譜・書誌については、昭和女子大学近代文学研究室『近代文学研究叢書 第五四巻』（昭和女子大学近代文化研究所、1983年4月）掲載の槍田良枝編の「著作年表」・「資料年表」や『定本野口雨情』（未来社、1985年11月～1987年1月）掲載の野口存彌編の「年譜」があるが、その後に発見されたさまざまな資料に基づく成果が反映されておらず、不十分なものとどまっている。そのような現状を踏まえ、本論文では、新出資料の検討やさらなる文献の発掘を精力的に行うことで雨情の活動をより正確に記述することが目指されている。とりわけ、不明の点が多かった地元茨城での動向について、散逸している地元詩誌に当たることで伝記の空白部分を埋めることが心がけられている。

本論の成果としてまず挙げられるべきことは、数多くの伝記的事実を解明・確定させたことであろう。例えば、『小柴舟』1902年1月号の野口夕吹「枯露柿」が雨情作であること、中央文壇への橋渡し役として常総新聞社の同僚であった矢橋夕影が介在したこと、父の死去で帰郷した雨情が地元誌に新作を発表していたこと、「北濤野人」が雨情の筆名の一つであることなどが、本論文で指摘されている新たな事実として挙げられる。また、新出資料によって裏づけながら、社会主義の受容が初期に限定されない持続的なものであったこと、雨情の結婚が、婚礼と婚姻届の提出とがずれるものであったことなどの指摘は、

妥当な判断であり、今後定説となっていくものであろう。

本論文によって、従来不明であった雨情の初期の活動が詳細にたどれるようになったことは意義深い。とりわけ、雨情と茨城の活字メディアとの結びつきを考証し、地元で培われた人脈を通じて雨情が発表舞台を得ていったこと、詩壇空白期の雨情が飛躍を期して創作活動を持続させていたことを突き止めたことは注目される。茨城と東京との往還、さらには北海道への転勤など、移動をしながら雨情が習作期を送ったことは、童謡・民謡詩人を準備した環境として重要であり、具体的な動向は作品研究の大きな手がかりとなる。雨情の詩集が刊行直後どのように受容されていたかを、さまざまな紙誌の紹介記事を集積することで浮かび上がらせた成果も同様である。また、童謡・民謡の普及活動で全国を行脚した雨情の足跡が紙誌の消息記事を参照することで具体的に突き止められていることも、伝記研究を着実に前進させるものである。

本論文の実証的な考察が持つ意義は、高く評価されてよい。従来の野口雨情の伝記の偏りや不十分さが補われ、新たに見出された文業と合わせて検証されることで、実生活と創作との相関はより詳細に把握することが可能になった。推測を極力排した客観的な論述も信頼性を高めるものであり、本論文が野口雨情研究の基盤を固めるものであることは疑いえない。

伝記研究は、時間を要する研究領域であり、対象とする文学者の生涯をくまなく見渡すことは容易ではない。本論文においても、童謡・民謡詩人としての活躍が本格化する時期以降の論述にはまだ手薄な部分が見られ、今後の増補が望まれる。また、作品分析を積み重ねた上で野口雨情が童謡・民謡詩人としていかなる功績を残したのか、文芸史に位置づける考察を展開する必要もあろう。

上述のような課題はあるものの、本論文が精密な伝記研究として野口雨情研究に寄与する意義を持つことは確かである。審査員は、本論文が「博士（文学）」（乙）の授与に相当するものであることを全員一致で認定する。

博士學位論文要旨集

内容の要旨および審査の結果の要旨

第 20 集

平成28 (2016) 年 3 月16日

発行 二松學舎大学大学院

編集 二松學舎大学 教学事務部 教務課

〒102-8336 東京都千代田区三番町 6 番地16

電話 03 (3261) 7406